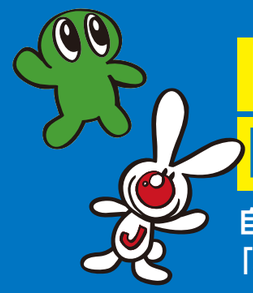


「今、つたえたいこと」を映像にしてみませんか?

自分たちが「今、つたえたいこと」をテーマに
「SDGs」を意識して作品づくりに取り組みましょう!

子どもたちによる
“映像制作”をぜひ、
授業や**クラブ活動**に
活かしてください。

- 授業(総合的な学習、国語、社会、理科、道徳、生活科など)やクラブ活動で取り組んでいただけます。
- インターネットや他校訪問を通じ、国内外の参加校と交流できます。
- 撮影機材の貸し出しや技術的サポート、ノウハウの提供は、KWN日本運営事務局が行います。
- コンテストを毎年開催し、優秀な作品を表彰します。
  ※最優秀作品賞受賞校は、各国の代表校との国際交流イベントへの参加を予定しています。

応募要項

必読!!

応募資格

■部門(3部門制)
小学生部門・中学生部門・高校生部門

◎学校内のクラブ、有志、クラス等のチームであること
◎指導できる先生または担当者がいること
◎学校長の承認を得ていること
◎作品の提出ができること

提出物

1. 映像作品(DVD・BD・SD・データ便)
   ※1チーム1作品までの提出

   テーマ 「今、つたえたいこと」をテーマに「SDGs」を意識して作品づくりに取り組みましょう!

   時間 3分以上5分以内の作品

2. 取り組みに関する活動報告書およびアンケート(A4サイズ3枚~4枚)

※提出いただきました映像作品につきまして、下記の取り扱いをいたします。

①応募作品の著作権はパナソニック ホールディングス株式会社に属します。
②パナソニック ホールディングス株式会社のホームページならびに企業サイトへの写真・映像掲載
③YouTube内に設置した「チャンネルパナソニック」ならびに「KWNチャンネル」への掲載
④パナソニック ホールディングス株式会社の広告利用ならびに各種メディアへの写真・映像掲載
⑤各種報道機関での写真掲載と映像放映(新聞・TVでの写真記事・映像として使用)

2024年度応募要項はKWN日本WEBサイトをご覧ください。また著作権、肖像権についての注意点も併せて右よりご確認ください。

年間スケジュール

詳報はメールマガジンでお知らせします

- 参加校募集開始
- 参加決定通知(新規参加校) 4月~5月
- 新規参加校への貸し出し機材発送
  5月~6月 ※機材は数に限りがございます
- 新規参加校向けワークショップ申し込み開始
- 参加校研修会(指導者+児童・生徒)
  6月~11月(オンラインを予定)
  ※決定しだい告知いたします
- 各種ワークショップの実施
  6月~11月(リアル・オンライン)
- KWNグローバルサミット2024
  10月 ※2023年度 最優秀作品賞受賞校が参加
- 作品提出締切日
  2025年1月14日(火)必着
  ※応募要項をご確認いただきご提出ください
- 事前審査会・最終審査会
  2025年1月下旬~2月中旬を予定
- KWN日本コンテスト2024表彰式
  2025年3月初旬~中旬を予定
  ※決定しだい告知いたします

キッド・ウィットネス・ニュース(KWN)は、グローバルに展開する次世代育成支援プログラム。これまでに累計18万人以上の子どもたちや先生が参加しています(日本では2003年より活動し、これまでに約3万7000人以上が参加)。

KWN日本のWEBサイトでは、
活動内容の詳細や過去の入賞作品など、幅広い情報を公開しています。
https://holdings.panasonic/jp/corporate/sustainability/citizenship/kwn.html

2024.04

Panasonic

KWN KID WITNESS NEWS

キッド・ウィットネス・ニュース

KWNまるわかりガイド

20th Anniversary

「今、つたえたいこと」を映像にしてみよう!

KWN(キッド・ウィットネス・ニュース)とは、
1989年にアメリカでスタートしグローバルに展開する、
子どもたちを対象とした映像制作支援プログラムです。
映像制作を通じて協調性や創造性、コミュニケーション能力を
高めることが目的で、グローバルイベントを毎年開催。
国内外の参加校との交流を深めることもできます!

後援:文部科学省　国連広報センター

はじめに

INTRODUCTION

おかげさまで KWN日本誕生から20年を迎えました！

いま一度、原点に立ち返り、より一層、社会において有意義な「教育プログラム」としての役割を果たしていきます

映像をつくる際に大事な「想像力」がコミュニケーション能力や伝達力の養成につながる

株式会社ハット
企画演出部
ディレクター
山口 香氏

携帯電話やタブレットで撮った動画をSNSに上げるなど、今でこそ映像が非常に手軽なものになっていますが、その反面、動画撮影時の迷惑行為が問題視されるケースもあります。そんな状況下でKWNは、映像文化の間口を広げるのはもちろん、映像の正しい使い道を示していける活動だと思います。子どもたちは、テーマや伝えたいことを考えに考え、観る人の気持ちまで考慮して作品をつくっています。10年近くKWNの審査員を担ってきましたが、毎年、子どもたちの自由な発想には驚かされることも多く、常に新鮮な感覚を味わってきました。実は映像をつくる時に大事なのが想像力です。「こういう表現をしたら相手はどう感じるのか」「自分はこれで理解できるけど、相手に意図は伝わるかな」など、相手のことを考え、どう伝えるか、イメージしなければなりません。このような考え方は、コミュニケーション能力や伝達力を養うことにもつながります。たとえ映像の仕事に就かなかったとしても、将来、役に立つさまざまな経験をKWNの活動を通して得られると思います。

探究学習の授業の一環として参加

三重県 高田中学校
川北佑奈 先生

「子どもたち自身で考えるきっかけになる」というのがKWNに対する第一印象。映像制作の過程では、スケジュール管理や取材先への対応の仕方、取材同意書の作成など、必要最低限の指導はしましたが、基本的には傍観者のスタンスで、子どもたちが意見を求めてきた時だけ答えるようにしていました。実際に「次はこういう取材がしたいです」など、子どもたち主導できちんと進んでいきましたし、経験を通して自信を持てたと思います。何も知らなかった子どもたちが、翌年、後輩たちを指導できるまでに成長した時は喜びを感じました。子どもたちの成長を学校としても実感できたため、それまでは放送部として参加したのが、昨年度は中学3年生の探究学習という授業の一環で参加。KWNは、子どもたちの成長をさまざまな面で感じることができます。

作品が「SDGs」のどの項目に該当するのか意識して

「今、つたえたいこと」の具体的なテーマが決まったら、その内容がSDGsの17の項目のうち、どれに該当するのか考えてみましょう。とは言っても、最初からSDGsありきで作品のテーマを決める必要はありません（SDGsに囚われすぎると画一的な内容になりがちです）。まずは、子どもたち自身の自由な発想や意見を取り入れて、作品づくりを始めることが大切です。

創造力の伸長や人間的成長を実現するプログラム

KWNは映像制作のプロセスを通じて、子どもたちの創造力の伸長や人間的成長を実現するプログラムです。プログラムに参加することによって、映像制作のスキルだけではなく、コミュニケーションやチームワーク、意思決定といったスキル、将来設計や国際理解への意識への肯定的な影響が2017年度からの社会的インパクト評価の実施によって示されています。KWNプログラムの特色は、小学校から高等学校までの異なる学齢や、普通科に加えて、特別支援教育など異なる環境下の子どもたちにも、その特性やニーズに合わせ、多様な学びの機会を提供できることです。子どもたちが映像制作に取り組み、自らの伝えたいテーマを議論し、実際の制作のプロセスで試行錯誤を重ねることで、制作スキルだけではなく、社会課題への関心、自分と社会とのかかわり、仲間との関係性の成熟などがみられています。学校現場での活用の進展を期待致します。

特定非営利活動法人
ソーシャルバリュージャパン
代表理事 伊藤 健氏

1 社会的意義

作品の背景となっている、身の回りにあるさまざまな社会問題について、課題を“自分事”としてとらえ、深く考える機会を持つ
（課題設定ができる）

2 チームワーク・役割分担意識

全体の中での自分の役割を認識する。その役割を効果的に果たすにはどのような行動が求められているかを理解し、行動できるようになる

3 コミュニケーション能力

一つの事業にチームでかかわる経験を通じて、お互いの意見をぶつけ合い、調整するコミュニケーション能力を高められる

4 人間関係形成力

自他を理解し、協力してものごとに取組むことができる

5 将来設計力

夢や希望を持って将来の生き方を考え、前向きに自分の将来を計画する力を持っている

6 情報活用力

幅広く情報を調べ、それを将来の生き方の選択に活かす力を持っている

7 意思決定力

自分の意志や責任で自分のことを決め、自分にとっての課題に対して積極的に取り組む力を持っている

8 地域関心理解

自分の住んでいる地域に関心を持ち、よりよくしたいと考えている

9 国際理解

異なる文化や価値観、習慣に触れることで視野を広げ、多様な考え方があることを理解する

（特定非営利活動法人ソーシャルバリュージャパン「KWN導入による子どもたちの成長を測定するためのモデル構築」より）

映像制作の大まかな流れ

1 テーマを決めよう

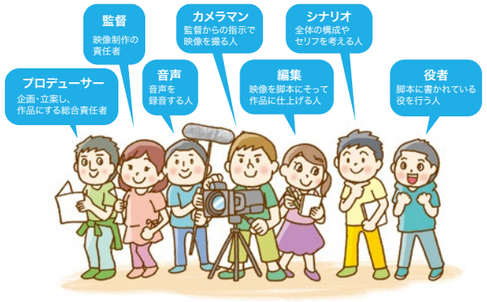
「今、つたえたいこと」は何か？どんなテーマで映像作品をつくりたいか、みんなで話し合いましょう。

2 調べてみよう

テーマが決まったら、それについて図書館やWEBなどで調べてみよう。また、目的の場所を実際に訪れたり、人に会ってみて、どんな風に撮影するのかを考えてみましょう。

3 シナリオをつくろう

大切なのは、人の感情的な内面の様子や感情の流れを描くこと。起きたことをそのまま伝えたり、調べたことを解説したりするだけでは、個性も出ませんし、面白い映像にはなりません。



4 スタッフ（役割）を 決めよう

映像制作は、みんなが協力しあってつくるもの。みんなの力をうまく合わせて一つの作品をつくるためには、各自が役割をきちんと理解し、行うことが大切です。

5 撮影しよう

撮る前にどういう流れにするのか監督とみんなで考えましょう。また撮影したら、必ず自分たちでその映像をチェックしましょう。

6 編集しよう

市販の映像編集ソフトを使って、撮影した映像を編集しましょう。画面サイズは1920×1080を選択し、フレームレートは60i に設定してください。

7 上映しよう

出来た作品は、必ずみんなで観てみましょう。制作時には分からなかった発見やドキドキ感があるはずです。

CHAPTER 1 WORKSHOP

KWN初参加校も常連校も安心!
子どもたちや先生の映像制作スキルに応じたワークショップを実施

KWNでは新規参加校はもちろん常連校まで、各校の映像制作スキルに応じて、第一線で活躍しているプロの講師によるワークショップを実施。サポート体制が充実しているので安心して映像制作に取り組むことができます。

子どもたちの映像制作レベルや課題にきめ細かく対応

新規校を対象におもに映像制作の基礎を教える内容から、ある程度、映像制作スキルを持っている学校に向けたより実践的なものまで、参加校は各学校のニーズに応じたワークショップを受けることができます。また、テレビ局など映像制作のプロによるワークショップや著作権・肖像権についてのワークショップも実施。昨今の事情に合わせ、オンラインか対面かを選べるなど柔軟に対応しています。

ワークショップ実施の流れ

事務局へ問い合わせ
↓
KWN映像講師がヒアリングし、最適なワークショップを提案
↓
ワークショップ実施
↓
ワークショップ後も映像講師によるケアが受けられる

ワークショップ プロの講師陣が映像制作の基礎を丁寧に指導

対面でのワークショップを本格的に再開した年となった2023年度。映像制作の第一線で活躍している講師陣が、学校などを訪問して子どもたちに直接指導しました。一方で2020年度から実施しているオンラインでのワークショップも継続。対面、オンラインにかかわらず、ワークショップではテーマ決めから、構成、撮影、編集と、映像制作の基礎はもちろん、映像のプロならではの視点から、考え方や心構え、具体的なテクニックを、子どもたちのスキルに合わせて指導しています。2023年度は計48校1462人が参加。そのワークショップの模様を一部ご紹介します。

和歌山県・和歌山市立有功東小学校

初参加ながら、さまざまなアイデアが続出!

和歌山市街からほど近い同校では6年生の1クラスが参加。まずは映像制作にあたり、起承転結の重要性など基礎を座学でレクチャー。当初こそ緊張した面持ちだった子どもたちですが、グループに分かれて実際に撮影を経験した後半には、みんなキラキラした笑顔で初めての撮影を体験しました。子どもたちからも撮影に関するさまざまなアイデアが続出。コンテスト参加への手応えを掴んだ様子でした。

ワークショップでは監督を担当しました。講師の話は面白かったですし、撮影では「用意スタート！」という指示出しが特に楽しかったです

島袋莉旺 さん

自分はどういう役割がやってみたいかな、何が合っているかなと考えながら、撮影を体験しました。クラスのみんなと頑張りたいです

中屋希美那 さん

子どもたちに映像制作を経験してほしいと考えていた際にKWNのことを知りました。初めてなので不安な部分もありますが、チームとしても一つにまとまる機会に出来たらと思います

前田 峻 先生

東京都・国立市立国立第八小学校

機材の扱い方や心構えを中心にレクチャー

国立駅のほど近くにある同校では3年生が初参加。座学ではみんな無事に作品づくりができるよう、機材の扱い方をレクチャー。また収録の際に入ってしまう雑音に対する注意点などさまざまな知識を教わりました。その後は、グループに分かれて撮影を体験。当日はあいにくの空模様でしたが、積極的に役割分担をして、撮影体験を楽しむ子どもたちの笑顔が印象的でした。

プロが使っているカメラを体験できたのが嬉しかった。まだ分からないことが多いけど、みんなで協力してよい作品を作りたいです

上條蒼馬 さん

撮影用のカメラを使ったことがなかったので、撮り方を教わったのが嬉しかったです。見ている人が感動できる作品を作りたいと思います

小澤奏子 さん

「地域の桜の木を守ろう」という活動をより多くの人に届けたいと思い参加を決めました。ワークショプに子どもたちも惹き込まれていたので、意欲的に作品づくりが進められると思います

平野公隆 先生

熊本県・南関町立南関第二小学校

映像制作に不可欠な3つのポイントを指導

KWN常連校である同校も昨年に続き、6年生15人がワークショップを受講しました。「怪我をしない」「機材を大切に」「チームワークの大切さ」といった3つのポイントを映像講師からレクチャーされた後は、いざ実践編。子どもたちは飲み込みが早く、あれこれ積極的に撮影体験を楽しみつつも、時に真剣な表情。チームワークの良さをうかがうことができました。

撮影でのポイントや大変さが分かりました。実際に役者を体験してみて、監督との相性やコミュニケーションの大切さを感じました

浦部海斗 さん

初めていろいろな機材に触れることができ、とてもいい思い出になりました。分かりやすく、心に響くような作品を作りたいです

立山千寿 さん

子どもたちの目がキラキラと輝いており、自分たちで映像を撮ってみたいという意欲を感じました。映像制作していく中で課題も出てくると思いますが、団結して乗り越えられればと思います

廣田瑞樹 先生

鹿児島県・鹿児島修学館中学校

より実践的なワークショップを実施!

大講義室でワークショップに臨んだのは何と180名以上の生徒たち。まずは基礎から入り、その後は「シナリオのつくり方」や「制作スケジュールの組み方」「ロケハンの重要性」など同校からのリクエストに応える形での内容となりました。講義にはすでに映像制作の経験がある生徒たちも参加。より実践的かつ専門的な指導も行われ、生徒たちは時に真剣に、時に笑顔で、講師の話に聞き入っていました。

普段あまり意識したことがなかったのですが、ワークショップは、SDGsの目標を達成できるような活動はないかと考える機会となりました

町田あおい さん

今回学んだ映像制作の技術を活かして編集をしたい。また、さまざまな考えを持つ人々全員に伝わるような作品作りを目指したいです

馬場結花 さん

楸田奈生 さん

本校教員がパナソニック教育財団助成贈呈式に参加した際にKWNの活動をご紹介いただいたことが参加のきっかけです。ワークショップが生徒たちにとって貴重な経験になればと思います

佐野愛莉 先生

夏休みはテレビ局で実際にプロの現場を体感!［企業連携ワークショップ］を実施!

局内のマスター室を見学したり、アナウンサーからのワークショップを受ける生徒たち。プロの現場だけに緊張感した表情で臨む

2023年8月9日に関西テレビとの共催「スペシャルコラボワークショップ」を初めてリアルで開催しました。参加したのは関西圏を中心に関東からの参加も含めた35名の子どもたち。午前中は映像制作に関する関西テレビのレクチャーを受けた後、2班に分かれてマスター室を見学しました。午後は関西テレビの藤本景子アナウンサーによるアナウンス講座を受講。発声練習の後、実際に放送されたミニ番組の原稿を使用して全員がナレーションに挑戦。原稿を正しく理解する方法や「伝える力」のスキルとして言葉に表情をつける方法などのレッスンを受けました。

時間や場所に縛られず、手軽にノウハウを学べる!オンラインワークショップも開催!

コロナ禍以降は新たにオンラインでのワークショップもスタート。開催時間や場所などの制約がなく、対面さながらのワークショップを受けることができると人気です。参加校にとっては、対面かオンラインか、ワークショップ受講の選択肢が広がったと言えるでしょう。

CHAPTER 2
KWN Kids Report

子どもたちがジャーナリストとして さまざまなイベントを取材し、番組を制作!

KWNの取り組みは、コンテンストに向けた映像制作だけではありません。子どもたちが自分で取材し、映像にして伝える「キッズレポート」も年間を通して実施中。その取り組みをダイジェストで紹介します。

KWN キッズレポート こどもジャーナリストとして 自分たちで発信する力を養う!

KWN立ち上げからの理念である「子どもジャーナリストの眼を育てる」。それを実践する場として、2015年から始まったのが「キッズレポート活動」です。子どもたちが記者となり、体験をしながら関係者にインタビュー。パナソニックオープンゴルフトーナメントをはじめ、さまざまなイベントを取材し、番組を制作します。プロカメラマンたちの指導で、子どもたちが自分で考え、さらに世の中に発信するという「力」を養うことができます。

福島「復興」応援アクションをレポート!

パナソニックグループが実施する「福島『復興』応援アクション」を取材するために、2023年8月22日、福島県いわき市立中央台南中学校の生徒4人が、大阪府門真市にあるパナソニックホールディングス本社を訪ねました。

今回の取材は、社員食堂で提供される福島の食材を使った「福島復興応援メニュー」と、福島県産品を販売する「ふくしまマルシェ」。子どもたちは、7月から地元福島で食材の生産現場を取材するなど、事前に準備をしてこの日を迎えました。最初こそ緊張気味でしたが、終始笑顔を絶やさず、大人顔負けのレポーターぶり。関係者や食事をした社員たちに話を聞いたほか、楠見雄規グループCEOへのインタビューも臆することなく行いました。

生徒たちはとても緊張していましたが、楠見CEOをはじめ、みなさまに気さくに対応していただいたおかげで、素の自分たちを出せた良いインタビューができたと思います。またみなさまが福島のことを理解していただいていると知り、嬉しそうにしていたのが印象的でした。こんな対応もできるんだなと、生徒たちの成長も感じられました。

亀岡 点 先生

映像はこちら!

西山幸来 さん

相手の話に対して自分の考えを伝えたり、切り返して質問をするのが難しかったです

清水晶子 さん

棒読みではなく、なるべく自然でいられるように相手の顔を見て話すことを意識しました

荒かりん さん

インタビュー中はカメラの位置やマイクの向け方など注意することが多くて大変でした

三保陽依 さん

ガチガチでしたが、楠見CEOが気さくに話しかけてくれたので緊張が解けて良かったです

1「ふくしまマルシェ」で福島県の食品などを購入する楠見CEO。子どもたちも嬉しそう。2福島県を題材にしたクイズを交えながら楠見CEOにインタビュー。3「福島復興応援メニュー」を試食。4県産食材を使った「牛ももステーキとスズキのロティ」。米も福島県産。5福島県産の食材をどうメニューに活かしたかなどについてスタッフに質問

パナソニックオープン ゴルフチャンピオンシップ／パナソニックオープン レディースゴルフトーナメントを取材

今年度は2校がゴルフトーナメントを取材。若手選手をはじめ、運営本部や練習場管理の方たち、アナウンス担当者、キャディーなど、大会を支える人たちを幅広くインタビュー。また、選手紹介のスタートアナウンスに挑戦するなど、貴重な体験となりました。

東海大学付属大阪仰星高等学校・中等部

映像はこちら!

昭和学院中学校・高等学校

宇宙飛行士の野口聡一さんに単独インタビューを実施!

5月5日に日本科学未来館で開催した「未来空想新聞2040」発行記念イベント「こども未来空想会見」の模様を、森村学園初等部と小田原市立桜井小学校の合同チームがレポート。野口聡一さんへのインタビューも行いました。

映像はこちら!

宇宙人の存在や宇宙ステーションでの滞在経験などの質問を野口さんにぶつけるキッズレポーター

「こどもの日は、未来を考える日。」というメッセージを掲げ、より良い未来をみんなで空想する「未来空想新聞2040」を発行

陶芸体験に参加した生徒たちを 日本伝統工芸近畿展でレポート!

「公益社団法人 日本工芸会近畿支部」が次世代育成の一環として毎年開催している体験会。2022年度は京都府立朱雀高等学校で工芸会講師の指導のもと陶芸教室が行われました。生徒らが思い思いにつくった作品は、2023年4月15日に京都高島屋で開催された「第52回日本伝統工芸近畿展」に展示。その模様を京都府立南陽高等学校 附属中学校・放送部の生徒たちが朱雀高校の生徒や関係者へインタビューを実施しました。

映像はこちら!

1陶芸体験についてさまざまなインタビューを行った。2陶芸教室の様子。普段慣れない体験に戸惑いながらも集中する朱雀高校の生徒たち。3日本工芸の魅力と伝承の大切さを関係者に質問

CHAPTER 3 INTERNATIONAL EXCHANGE

さまざまな国の人々と国際交流ができる貴重なイベントを実施！

KWNでは、IOC Young Leaderを招いてのワークショップや、世界各国のKWN参加校が一堂に介するグローバルサミットなど、映像制作コンテスト以外にもさまざまな貴重な経験の場を用意しています。

IOCヤングリーダー×KWN 自分事としてSDGsを考える絶好の機会に

鹿児島県・鹿児島修学館中学校の場合

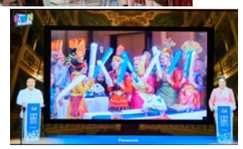
「ワークショップを通して日常でSDGsの目標を達成できるような活動はないかと考えるようになった」など、SDGsを再認識するよい機会となった

IOCに選出された世界中の若者が「ヤングリーダー」として、ユース世代を巻き込む活動を自ら計画・実行する社会貢献プログラムである「IOC Young Leaders Program」。ニュージーランド在住のBerber Swart さんとオンラインでつなぎ、生徒10名と国際交流を実施しました。Berberさんはスポーツを通じて人生をポジティブに楽しむ「Mind Power 」プロジェクトを説明。対する生徒たちは英語で地元・鹿児島を紹介、さまざまな質問が飛び交うなど、とても有意義な時間を過ごしました。

グローバルサミット 9カ国の子どもたちがオンラインで交流！

9カ国、18校、約150名の児童・生徒と関係者が参加した「グローバルサミット2023」が、2023年10月21日にオンラインで開催されました。

日本からは、森村学園初等部、小田原市立桜井小学校、高田中学校、愛知県立大府特別支援学校が参加。時差を考慮し、21時からスタートした本編は、参加校紹介、現地の言葉で挨拶するなどで親交を深めた後、IOCヤングリーダーが登場。その取り組みや意義を説明し、SDGsの目標について各国ができることを議論しました。クライマックスである各アワードの表彰式では、子どもたちが一喜一憂するなか、受賞校が次々と発表。日本勢の健闘も目立ちました。



ブラジル、カンボジア、中国、インドネシア、フィリピン、UAE、アメリカ、ベトナム、日本がオンラインで参加。日本では本編開始前に、IOCヤングリーダーのセミナーやパナソニックセンター東京館内ツアー、参加校交流会が行われた

神奈川県・森村学園初等部のみなさん

文化や言語などは全然違うけど、会話をして言葉を教え合ったことが印象に残っています！

参加国も増え、対面で行っていたグローバルコンテストの雰囲気に戻ってきたのが何よりも嬉しいことでした
榎本 昇先生

神奈川県・小田原市立桜井小学校のみなさん

実際のスタジオを見られたし、国ごとに衣装や背景が違い、特色が表れていて面白かったです

会場での子どもたちのキラキラとした表情は忘れられません。この活動の価値を改めて実感できた1日でした
鈴木遼輔先生

三重県・高田中学校のみなさん

セカンダリー（中学・高校生部門）パナソニックアワード受賞！

サミットを通して、たった1つの大切な地球の環境について改めて考えることができました

生徒たちからは、招待していただいたという自覚を持って、真剣に参加している様子が見受けられました
川北佑奈先生

愛知県・愛知県立大府特別支援学校のみなさん

モニター上であっても、世界の人たちと同じ喜びや感動を共有できてとても楽しかったです

生活経験の少なさや行動範囲の狭さを日々感じる生徒たちにとって、すべてが新鮮で衝撃的な体験でした
松本伸浩先生

CHAPTER 4 INTERVIEW

2022年度 Panasonic賞受賞校インタビュー

チームワークの良さがよい結果につながったと思います

パナソニックの社員たちによって選ばれるPanasonic賞を受賞した三重県・高田中学校放送部。受賞作『米ストローから覗く世界』の制作に参加したメンバーに、喜びの声や撮影秘話などについて伺いました。

車久米穀店に取材に行った際の主要メンバー。ストローを使ってみんなでドリンクを飲んでいるこのシーンは作中にも登場する

2022年度KWN日本コンテスト
最優秀作品賞／Panasonic賞／ナイスプロモーション賞

「米ストローから覗く世界」 制作：三重県 高田中学校

あまり知られていない「米ストロー」を題材に、考えるきっかけや、行動を起こすことの大切さに気付かされる作品。環境課題だけでなく、フードロスの削減や雇用創出にまで言及している。

「Panasonic賞は1作品しか選ばれないうえに、多くの社員の方たちに評価していただいた結果だと知って、本当に嬉しかったです。制作は中学3年生だった2人を中心に15人ほどが関わっていましたが、カメラマンもその時にできる子が担当するなど、全員で取り組んだ作品でした。テーマが決まったのは、メンバーの1人が米ストローを使ってパスタをつくる動画を偶然、観たのがきっかけです。米ストローについて調べたらSDGsに特化していたので、『これをもっと深掘りして、広めることができたらいいよね』と。テーマが決まった後は、過去の映像作品を参考に構成を考え、先輩や先生の意見を取り入れ、最終的にはみんなで話し合いながら進めました。

米ストローを扱う『車久米穀店』さんに取材させていただいたのですが、校外にインタビューに行ったのは初めての経験。すごく緊張しましたが、温かく迎え入れてくれて、すごくありがたく感じました。私たちは先輩後輩関係なく、みんなで1つの作品をつくり上げました。チームワークは大切で、それがよい結果にもつながったと思います」

川北 佑奈 先生

「自信を持ってインタビューする様子を見て、彼女たちの成長を感じました」

OGインタビュー

協力しながら1つの作品を作り上げる楽しさは格別！

「将来は映像の仕事に就きたい」と話すKWN OGの廣瀬鈴菜さん。そう決意した経緯や理由を語っていただきました。

現在は大学で映画学科を専攻しているという廣瀬さんですが、高校で放送部に入部する以前は映像にまったく興味がなかったそうです。

「放送部にも軽い気持ちで入部しました。部では撮影を任される機会が多かったのですが、自分で撮った映像が作品として評価されることに次第に喜びを感じるようになって。それが原動力となり、より良い作品を撮りたいという欲求が高まっていきました」と、映像制作にのめり込んでいった経緯を語ります。

「みんなで力を合わせて、協力しながら1つの作品をつくり上げる楽しさは格別ですし、普段、一緒に遊ぶだけでは知ることのできない友だちの内面に触れることもできます。『ボクのこと ワタシのこと』をつくったメンバーとは強い絆で結ばれたと感じています。KWNでの経験はかけがえのない思い出になるはずです。大変なことも多々ありますが、『自分は貴重な経験をさせていただいている』と意識すれば、頑張れると思いますよ」

廣瀬 鈴菜 さん

宮崎県 宮崎日本大学高等学校卒業。現在は日本大学芸術学部映画学科で映像の勉強に励む毎日を送る。

2021年度KWN日本コンテスト
最優秀作品賞／Panasonic社員賞／アイデンティティ賞

「ボクのこと　ワタシのこと」

制作：宮崎県 宮崎日本大学高等学校

兄妹を主人公にドラマ仕立ててジェンダー問題を扱った意欲作。「男だから」「女だから」という固定概念に一石を投じている。カメラアングルを含め演出についても高評価を得た。

CHAPTER 5 AWARD

まれに見る大接戦に審査が白熱するなか最優秀作品賞の行方は!?

全国の小学生、中学生、高校生たちが、2023年度も「今、つたえたいこと」をテーマに、SDGsを意識した作品作りに取り組みました。今年の参加校は95校、158チーム(1828人)。ドキュメンタリー作品が主流の中、ドラマや自作のラップに映像をつけた作品、YouTuberとなりゴミ拾いをレポートする作品など、時代の変化に順応したさまざまな手法や取り組みが見られたのが印象的でした。

2月中旬に審査員による「最終審査会」を実施

最終審査会は、今年度も対面形式で2月中旬に実施され、小学生、中学生、高校生の部門ごとに最優秀作品賞および賞名が決定しました。8名の最終審査員は、事前にノミネート作品を観て採点をし、その集計結果をベースに話し合います。中学生と高校生の部門は、意見が割れることなく比較的スムーズに最優秀作品賞が決定しましたが、昨年度、2作品に最優秀作品賞を贈る異例の事態となった小学生部門は今年度も難航。ノミネートされた3作品が、史上初めて同じ点数で並ぶという結果に。審査員は3作品それぞれについて評価ポイントを説明し、それに対して意見を交わす展開に。その結果、全員が納得する形で収まり、すべての受賞作品が決まりました。

8名の最終審査員がノミネート作品をチェック!

長い時間をかけた「学習活動」の文脈の中に取材があって、複数の学習者の議論や協働の末に生まれるのが、KWNの映像です。いつも「どんな豊かな学習活動がこの映像を成り立たせているのだろう」と楽しみにしながら観させてもらっています。

黒上 晴夫 氏
関西大学
総合情報学部
教授

今年の最終候補作品、一つ一つにより心に染みる個性を感じました。身の回りの出来事をテーマとして見つめ直すことで、本心が自然と現れて深みが増していたようです。一方作風はバリエーションが豊かで、観客としても楽しませていただきました。

伊藤 有壱 氏
東京藝術大学
大学院
教授

作品のレベルが年々上がっていると感じます。連続して参加いただいている学校だけでなく、初めての学校であってもそのように思います。今後も継続して映像制作に取り組んでいただき、大きく成長してもらえればと願います。

谷口 昌利 氏
パナソニック
コネクト株式会社
メディアエンター
テインメント事業部
プロフェッショナル
AV事業総括担当
ダイレクター

力強いメッセージの作品ばかりで、審査にあたって今回もとっても悩みました。さまざまな社会課題に真正面から取り組んだ作品が多く、スキルの向上も素晴らしかったです。全体を通じて「日本のいま」を切り取っていると感じました。

飯田 香織 氏
NHK報道局
ネットワーク
報道部長

今年の参加作は、さらに一皮むけた素晴らしい作品ばかりでした。ここ数年の作品のレベルアップには本当に驚かされ、参加者が持っているエネルギーに圧倒されています。未来を創るクリエイターとして成長していることを頼もしく感じます。

中村 亮 氏
プレジデント社
プレジデント
ファミリー編集部
編集長

KWNに応募される作品は、テーマを考え、構成を考え、人にどのように伝わるかを考え抜かれたものばかりです。そういう作品をつくる経験をされた学生が、社会人になって映像の世界に入った方もいるとうかがいました。本当に嬉しく思います。

山口 香 氏
株式会社ハット
企画演出部
ディレクター

今年は、コロナ禍が多少の収束を見せ、制約も緩和。そのため、選ぶテーマも少し幅広くなり、取材や撮影の範囲も広くなりました。その分、子どもたちが協力して各自の力を最大限に活かし、丹精込めて制作している作品が目立ちました。

香月 よう子 氏
フリーアナウンサー
公益財団法人
東京学校支援
機構評議員

KWNが20年の節目を迎える中、今回初めて審査を担当させていただきました。テーマやストーリーも個性的で、涙が止まらない作品や地域愛が感じられる作品、笑顔になれる作品など、心に響く作品がたくさんありました。とても感動しました。

堂本 晃代 氏
パナソニック
ホールディングス株式会社
企業市民活動担当室
室長

2019年以来、久しぶりのリアル開催で会場は大盛り上がり!

2024年3月17日にパナソニックセンター東京で「KWN日本コンテスト2023」の表彰式が行われました。リアルな開催は実に5年ぶりで、最優秀作品賞にノミネートされた10校(小学生部門3校、中学生部門4校、高校生部門3校)の子どもたちと先生は、前日からイベントに参加。館内ツアーやKWN日本の20周年を記念した特別講演、参加校同士の交流を図るための顔合わせ会を楽しみました。

本番当日は2部構成。東京都葛飾区立金町中学校の2名がキッズサポートMCを務めた第1部は、パナソニック・主催者挨拶からスタートし、審査員と参加校の紹介を経て、佳作、特別賞3作品、部門賞が発表されました。休憩を挟み第2部は、20thアニバーサリームービー「レッツ!ジャンプルダンス」映像を観賞後、会場内の全員でジャンプルダンスを踊り、Panasonic賞の発表に。そして盛り上がった状態のままクライマックスである最優秀作品賞の発表とトロフィー授与を迎えました。今年度は、久々に子どもたちの喜びや驚きを直に感じることができました。

最優秀作品賞の栄誉に輝いたのはこの3作品!

小学生部門

最優秀作品賞/ベストメッセージ賞

「みんな大好き」

横浜市立西が岡小学校
チーム名:5くみB上級生グループ

「自分たちのことを知ってもらいたい」という声から生まれた作品。“5組の子どもたち”のありのままの言葉により構成され、「いろんな人がいる」「違うから楽しい」という明確なメッセージがしっかりと伝わってくる。映像の色による心の変化など演出にも着目したい。

人との違いで相手を傷つけてしまうのはとても悲しいことです。この作品を観てもらうことで、1人でも多くの人が笑顔で過ごせるようになってくれたら嬉しいです。

児童たちの声

中学生部門

最優秀作品賞/アイデンティティー賞

「Coming Back Home ~帰郷~」

いわき市立中央台南中学校
チーム名:放送委員会

東日本大震災を知らない中学1年生たちが、いまだに風評被害の残るふるさとについて、その日何が起きたのか、学び、考え、そして行動する――。その姿がドキュメンタリータッチで描かれている。震災に正面から向き合った子どもたちの成長も感じ取れる。

編集作業は大変でしたが、多くの人に話を聞き、実際に活動する様子を映像にしたことで、私たちの想いが伝わったのだと思います。後輩たちにも震災について知ってもらいたいです。

生徒たちの声

高校生部門

最優秀作品賞/SDGs賞

「ちょっとヒーロー」

宮崎日本大学高等学校
チーム名:SUNNY-STUDIO

SDGsよりも自分の夢や目標が大切。なかなか実感できない社会課題について、「日常の小さな行動が未来を変える」というメッセージを、子どもの頃に憧れたヒーローを題材に伝えている。本音で話しているからこそ、等身大の言葉として観る人の心に刺さる。

SDGsを特別な取組みにせず、やれる事から取組めばいいと思います。1人1人のちょっとした行動の中にヒーローは存在しているという意識を持ってもらえたら嬉しいです。

生徒たちの声

各賞の結果発表

小学生部門
ベストジャーナリスト賞
「陽だまりのような君たちへ」
神奈川県・森村学園初等部
Team 2023

中学生部門
ベストコミュニケーション賞
「中学生がつなげる人とまち ~100年後もこの島で~」
広島県・尾道市立瀬戸田中学校
瀬戸田中学校3年生

中学生部門
ベストシネマ賞
「見るもの全てが本当じゃない」
神奈川県・捜真女学校中学部
捜真女学校中学部

中学生部門
ベストクエスト賞
「地球を包む」
京都府・京都府立南陽高等学校附属中学校
南陽高校附属中学校放送局中3

高校生部門
ベストインタビュー賞
「かけ橋」
埼玉県・埼玉県立小川高等学校
グローカルメディア研究部2年

高校生部門
ベストシナリオ賞
「Reflect」
東京都・聖徳学園中学・高等学校
動画研究部・理科実験部合同チーム

小学生部門
Panasonic賞/ベストメモリー賞

「なくならないよ~私たちの宝物~」

南相馬市立八沢小学校
チーム名:八沢小学校5年生

閉校する学校の5年生9人による作品。リレーや音楽祭など、思い出がストレートに語られていて、子どもたちの学校への想いに共感できる。校舎の活用にまで言及し、郷愁だけではなく未来への希望も持てる。